



日 口 交 流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



2025年度第1回日口交流バスツアー

岡崎 好典

交流ツアー一部会では、2月16日(日)に2025年度第1回日口交流バスツアーを実施いたしました。このツアーは、ロシア側の要望をもとに企画した群馬・栃木方面への日帰りツアーであり、ロシア人28名、日本人9名の計37名が参加されました。訪問先は、「カルピスみらいのミュージアム」(群馬県館林市)、「足利学校」(栃木県足利市)、「多々良フレッシュファーム」(群馬県館林市)の3か所でした。バス会社は、過去に何度もお世話になっておなじみの「KENドリーム」であり、また、運転士の小暮さんは、2024年3月に高山・白川郷に行った際にも運転してくださいました。高度な運転技術をお持ちなのは十分に承知していましたので、安心して運転をお願いすることができました。

当日は、集合時間にいらっしゃる方がいた関係で、15分遅れの8時15分ごろに大使館前を出発しました。「カルピスみらいのミュージアム」の予約が10時だったので、間に合うか心配したのですが、日曜日にもかかわらず、高速道路の渋滞もなく、理想的な時間である9時55分に到着することができました。

「カルピスみらいのミュージアム」では、1グループで案内するには人数が多過ぎるとの理由から2グループに分かれ、イワンさんと小川さんに各グループの通訳をお願いし、約90分をかけて、「カルピス」の歴史や想いがわかる展示物と製造工程の見学、工場で作られた「カルピス」の試飲、そして買い物を楽しみました。「カルピス」は「初恋の味」と言われていましたが、今回、あらためてカルピスを飲んで、まだ初恋なんて年齢でもない小さい子供のころに、家で兄弟と瓶に入った濃縮原液を、濃さをいろいろ試しながら薄めて飲んでいたことを思い出し、とても懐かしく、また家族がとてもいとおしく思える気持ちになりました。

昼食は、創業1947年の館林うどん「うどん本丸」で天ざるうどんをいただきました。ロシアの方も箸をうまく使われていて、おいしく召し上がっていただけたようなので安心しました。午後は、栃木県足利市まで移動し、日本遺産に指定されていて、日本最古の学校と言われ

ている「足利学校」に行き、50分ほど見学をしました。本来ならば、我々がロシアの方に案内をすべきところでしたが、手違いから自由見学になり申し訳なく思っております。

なお、校内の遺蹟図書館では、2月5日まで「キリスト教宣教師と足利学校」という企画展が開催されていて、『環海異聞』が展示されていたそうです。『環海異聞』とは、参考までに同企画展のHPの解説を引用しますと、「寛政5年(1793)11月、石巻港を出て江戸に向かった船は、嵐で漂流、翌年ロシア領アリューシャン列島に漂着しました。船員の津太夫(1744~1814)らは、ロシア帝国のイルクーツクや首都ベテルスブルク等に8年間滞在した後、レザーノフに連れられて世界周航に出発、大西洋を横断してマゼラン海峡、ハワイ、カムチャッカを経由して長崎へ帰国。結果、世界一周したのはじめての日本人となりました。『環海異聞』は彼らから聞き取った記録を大概玄沢が文化4年(1807)にまとめた本です。鎖国であったため内容は極秘とされ出版はされませんでした。多くの写本(手書きで写した本)が出回っており、足利学校には2種類が遺されています。今回は、「キリスト教宣教師と足利学校」展に合わせて、比較的保存状態がよく、挿絵も美しい本を特別にご展示いたします。二百年以上前にロシア人と交流し、世界一周を果たした先人の業績や苦勞に思いをはせていただければ幸いです。」というものです。大黒屋光太夫より約10年後の話です。ぜひ皆さんに見ていただきたいのですが、時期が合わず残念でした。またいつかご案内したいと思います。

足利学校のあとは、再び館林市に戻り、「多々良フレッシュファーム」でいちご狩りをしました。広いハウスの中に「かおり野」「紅ほっぺ」「やよいひめ」「よつぼし」の4種類のいちごが区分されて植えられており、全体的に甘さは控えめながら、大粒のいちごから小粒のいちごまで、45分間思う存分いちごを食べて満喫しました。

欲を言えば、農場のすぐ近くの多々良沼にシベリアから飛来している白鳥を皆さんにお見せしたかったのですが、あいにくその日は白鳥を見かけませんでした。日本とロシアを自由に行き来することができる白鳥がとてもうらやましく思える昨今です。いちご狩りを満喫した後は、16時ごろ農場を出発し、大使館に向かいました。日曜日にもかかわらず、帰りも高速道路の渋滞がなく、18時ピッタリに大使館に到着することができました。なんと優等生的な時間重なりなのかと、運転士の技術の高さに改めて感心いたしました。(副会長)

お知らせ

●ロシア語教室生徒募集!

経験豊富なロシア人講師陣がレベルに合わせて指導してくれます。見学も1回のみ可能ですのでお問い合わせください。

●日口交流日帰りバス旅行

日時: 2025年3月15日(土)

場所: 醤油工場、川越散策など

費用: 9,500円、子ども6,000円

*上記ご参加は会員、その紹介者の方に限らせて頂きます。

●春の祭典・ひと月遅れのマースレニッツァ

日時: 2025年3月23日(日) 18:00~20:30(予定)

会費: 1,500円

*民族の踊りやブリヌイの試食を楽しみましょう。

お申込み、問合せ: NPO日口交流協会事務所

E-Mail: nichiro@nichiro.org Fax: 03-5563-0752

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「01」と入れてください。野口久美子氏にご協力いただきました。どうもありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会

連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org



キルギス料理講習会

安部 花子

1月26日、田町リーブラでのキルギス料理教室に参加しました安部と申します。今回もキルギス大使館の大使夫人ジャミーリャさんが企画してくださいました。講師のジャイナ先生とともに、キルギス料理を作っていきます！

今回の献立は、羊肉のショーポ、卵とネギのチェブレキ、ピーツとリンゴのビタミンサラダ、ヨーグルトタルトケーキの4品。ショーポとはスープのことで、野菜と肉をたっぷり煮込んで塩コショウやハーブでシンプルに味付けした透明なスープです。チェブレキは、春巻きより少し厚い生地にタネを包んで油で揚げる、うす皮揚げパンのようなおかずです。

さっそくショーポから煮込んでいきます。タマネギ・にんじん・羊の塊肉を煮込んでいくのですが、最初にまず日本人参加者の度肝を抜いたのが、野菜は皮をむいたあと、特に小さく切ることなくそのままの形で大鍋にイン！玉ねぎにいたっては外皮があと1枚むけていないかも？な状態で、かなり豪快な見た目となっています。家庭により違いはあるものの、このようなスタイルはキルギスでは珍しくないとのこと。完成後に具を取り出し、人数分を均一に切り分けてお皿に載せようとしてスープを注いでいきます。煮込む前に小さく切ると取り分ける際に大鍋の中を探さなくてはならないため、これはかなり合理的だ、と最初は驚いていた参加者一同も納得の表情。この知恵は和食や他の料理でも応用できそうです。

続いて、チェブレキの皮づくりに挑戦。強力粉を使ってこねる生地は少し固く麺棒で伸

ばすのに体力を要しましたが、完成後のモチリ感は格別。我々日本人は餃子をつくるとき、つい市販の皮を買ってしまいがちですが、やはり生地からこねたものは絶品でした。余ってしまった皮は2~3センチサイズにちぎり直し、さきほどのショーポの鍋に入れてしまえばスープの具に早変わり！キルギス主婦の知恵が光ります。これってすいとん鍋だ！と、和食との思わぬ共通点に参加者一同嬉しくなっていました。

40cm四方はあるであろう、オープン皿いっぱい焼きたあがったヨーグルトタルトケーキに歓声があがります。すべての料理が完成し、いざ実食タイム。普段羊の肉が苦手な私ですが、たくさんのハーブと野菜のコクで羊肉のうまみだけが引き出され、4杯おかわりする様子を先生に二度見されてしまいました。イスラム教徒である先生は普段から豚肉は食べないため、高価な牛肉に比べて使いやすい羊肉はプライベートでもよく使用する食材だそうです。日本でもそうですが、キルギスでも「家庭のレシピ」があり、先生も子どものころからお母さまの料理のお手伝いをしながらそれを習得されたとのこと。今回参加されていた先生の娘さんも、少しずつお手伝いをしながら「母の味」を習得中とのこと。キルギスのあたたかな家庭の情景が目に浮かぶような料理教室となりました。



雪の名前

キタヤマ 忍

冬、といえばロシアをイメージする人も多いが、雪の名前は知られていないことに気がついた。北国には雪の名前がいくつもあり、その名前一つで気温、湿度、降り方、時期など、気象条件・危険性などがわかるとても重要な情報のカプセルだ。地域によっては存在しない種類の雪もある。

今回ざっと調べただけでは、残念ながらロシアにある雪の名前の数は正確にはわからなかったが、民族ごとにそしてエリアも非常に広いので、多く存在していたようだ。気候変動も影響して、世界中の雨や雪の名前はいつの間にか忘れ去られていく。調べる事で少しでも残れば嬉しい。日本でも使えるものも含めていくつか紹介したい。

кухта (クフタ) シベリアの方言に由来。木の枝に積もった雪。綿帽子、しおり雪。

пороша (パローシャ) パウダースノー。夜に降り積もったフワフワの粉雪。

пужар (プージャール) モスクワ北東部・コミ共和国のコミ語で、パウダースノー。

позёмка (パジョンカ) 地吹雪
みぞれを指す言葉

мокрый снег (モークリイ・スニェグ) みぞれ

халепа (ハレパ) 湿った雪、冬の雨など天候を指す

рянда (リャンダ) 天気そのものではなく、ミズレが降って寒い状況を指す

лють (リュート) ダイヤモンドダスト。今はもうほぼ使われていない。1863年から1955年まで重版を繰り返したダール氏のベストセラー辞書「生きた大ロシア語解説辞典」に掲載されている。

流水が誕生するまでの各段階の名前やソリについてなかなか取れない雪などもあるのだが、もう少しじっくり調べていつかお伝えできたらと思う。(ビデオグラファー)



友禅教室で外国人から学んだこと

笠原 以津子

先日の教室では、展示会に出す作品を持ってきて頂き、チェックとフォローをしました。『ここに1つ蕾を入れると更によくなりますよ』この程度で、後は皆さんにお任せ。改めて作品を見てみると、皆さんの上達ぶりがはっきりと見えて、とても嬉しくなりました。

友禅を教えるようになって30年になります。教える事ほど勉強になるものはないと師匠に言われて始めましたが、その通りでした。何を聞かれるかわからないので勉強もする、見本は穴があくほど見られるので練習もする、しかも皆さんどんどん上手くなっていくので負けられないし。今迄かなりの人数の方とご縁があって指導をしてきましたが、ゼロからのスタートの方ばかりでした。私が弟子入りした時に師匠が「貴女のようにゼロからスタートのの方が教えやすい。癖がないからね」と言われましたがその通りです。筆の持ち方、線の書き方、ぼかしの入れ方など、基本通りに素直に進めてくれます。でも、いつからかそこに自己流が入ってきて、それぞれに味が出てきます。私はこれが個性であり、大切なものだと思います。

最初に指導した基本と少し違ってきても、その方が自分の感性で描いたものだからそれは素敵な個性であって、そこを大事にして更に進化に繋がるように指導していくのが私の役目だと思うのです。自分の友禅も友禅の世界の中のほんの1部にすぎないです。師匠から得た技術はそのままに、あとは自分の思うように描いていますし。

そして、私はロシアだけでなく他の外国人にも教えていますが、お国柄が出るのも面白いです。欧米に行った時、街の花屋さ

んを覗きました。そこには目が覚めるような華やかな色の花達が並んでいました。薔薇も、菊も、小花も、日本のそれらとは違って眩しいくらい明るい。日本に戻ってきて、花屋さんに並ぶ花がグレーのスプレーをかけたようにくすんで見えました。何故こうも花の色が違うのでしょうか。土、太陽、水、色々な要素があるのでしょうか。

私達が日頃見ている花の色は世界共通ではないということを改めて知りました。花だけでなく、葉の色もそして、空の色、雲の色、海の色、全てですね。小さい頃から目にしてきたものがその人の花の色であり空の色であって、見てきたものの違いを間近に見られるのはとても面白いです。

以前、ワークショップで4か国の人に同じ絵を描いてもらった事があります。インド、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、その国を言葉で紹介してもらうよりも鮮明でした。描きたいと思うもの、描いたものには‘その人’が顕著に表れます。手づくりはこれだから面白いです。これからも皆さんの個性を大切に、こちらでも沢山学びたいと思います。(常任理事)

友禅教室は月1回、大使館で水曜日、通商代表部で月曜日の夕方に実施している。最初はハンカチから、ランチョンマット、トートバッグなど体験し、最近はブラウスなどを自分でも選んでくるようになった。染みのついたものに描いてリサイクルしたり、染料は全員買って持っているので自宅でも挑戦して見せに来てくれる。先生の美しい見本をスマホに撮って同じものを描いてもそれぞれ全く違う作品ができるのを見るのは楽しい。(担当)

ソ連残留日本人の軌跡

畔上 明

2025年1月23日群像社より「ユーラシア文庫」の一冊として出版された降旗英捷「サハリン、ウクライナ、そして帰郷」はわずか百ページほどの手軽に読める小冊子ですが、内容はたいへんに重いものです。

副題に「ソ連残留日本人の軌跡」とあるように著者の降旗英捷(ふりはたひでかつ)氏は1943年南樺太(サハリン)生まれ、第二次世界大戦終戦後の樺太からの引揚げが様々な事情あって叶わず、70代も終わろうという2022年青天の霹靂ともいべきロシア軍ウクライナ侵攻により、どれ程悲痛な思いでおられたか、そのとき生活の拠点であったウクライナのジトーミルから日本へと逃れてきた、その過酷な幾歳月もの生涯が描かれているのです。

「日本サハリン協会」斎藤弘美会長らの尽力により3年前に故国にやってくる事が出来たのですが、そのあたりの動きは新聞やテレビなどでも報道され、ご覧になった方もおられるかもしれません。

「日本サハリン協会」の前身「樺太(サハリン)同胞一時帰国促進の会」を1989年ベレストロイカの時代に立ち上げた小川映一氏の活動記録や「樺太(サハリン)・シベリアに生きる【戦後60年の証言】」(2005社会評論社)といった彼の著作によって、戦後長いこと日本への帰国の機会を失いサハリンで生活してこられた同胞たちの、その運命に思いを寄せることは出来るでしょう。

降旗英捷さんは、サハリンでの生活ののち1962年レニングラード工科大学に進学したことから、日本人との接触はなくなりソ連人としての体験を重ねていきます。

悪ガキとしてのお茶目な幼い頃の記憶から始まり、1963年一家がサハリン南端のユージュヌィから北のポロナイスクへと強制移住させられ

た先での苦勞、レニングラードでの学生生活中に知り合ったリュドミーラとの結婚、1967年大学卒業後は一旦サハリンに戻り、奥さんと息子を呼び寄せはしたものの3年経って、リュドミーラの故郷ウクライナに移り住むことに。ウクライナでは幾つかの町を転々としますが、1972年ジトーミルに到着して以降40年に亘って様々な職場で降旗氏らしい責任感を発揮していったのでした。その間、酔っ払い対策、軍事教練、ソ連崩壊前後の経済の混乱、はびこる賄賂と汚職などに直面します。

ウクライナ現代史の裏面に赤裸々に語る、生き証人としての著者の批判精神も覗えます。端的な表現力、その美しい文体に惹きつけられて一気に読み通せる一冊ではありますが、実はこの本を著者はロシア語で執筆したのでした。

1歳のときに日本敗戦、樺太はソ連領となり呼称がサハリンへと改変、引揚げ機会を逸してロシア人の小学校に通い始めた頃より徐々にロシア語話者となり、青年期以降は日本語からは完全に離れてしまったのです。

ご両親が長野県安曇野出身であったことから、「信濃毎日新聞」に2023-24年にかけて連載された記事が今回の本にまとめられました。現在北海道旭川市に住む降旗氏の自立支援通訳を行っている桃子さんという方のサポートを得つつ、早稲田大学でロシア語を学んだ山口裕之氏が信濃毎日新聞の記者として、その翻訳、編集に携わり、素晴らしい日本語の文章となって目にかかる事が出来るのです。

カザフスタン旅行の3日目は、半日のツアーを参加してアルマトイ市から35キロに位置する絶景の高山湖ービッグアルマティレイク湖に移動。標高2500メートルのビッグアルマトイ湖は地域にとって重要な水源のため、一般の人は湖に近付くことができず、一部発行されたパスを所持している車で事前に申し込んだツアーに参加して湖を一望できる写真スポットに連れて行ってもらった。半日のツアー料金は1万円ぐらいで少し高いが、山の上のスポットから眺望する青く凍結した湖と雪山の絶景を見たら、やっぱり参加して良かったと感じた。

午後4時頃アルマトイ市内に戻り、少し市内散策して人気のご当地料理を楽しめた後、昔からずっと気になっているロシアンバーニャ(баня、ロシアン式のサウナ)を体験するために、アルマトイ市で一番歴史があるバースハウスのArasan SPAに向かった。1982年のソ連時代から続いてきた同施設は、アルマトイ市のシンボルのような場所で、料金も安く地元民にも愛用されている。最初は、日本のような温泉施設かと思っただけで湯がなく、サウナと水風呂だけ。サウナから上がりひたすらスチームサウナと岩盤浴だけを堪能した。また、郷に入っては郷に従えということで、「ヴェニク」(веник)と呼ばれるヴィヒタを使い背中を叩いたら、少しだけ一日の疲労を取り除いた気がした。

ホテルに戻り、ゆっくり休もうとした時、ズボンのポケットが軽いなと少し違和感があり確認してみたら、なんと、旅中ずっと頼っているスマホがない！どうやら帰りの際Yandexのタクシーに落としたようだ。その時は既に、日本への帰り便の出発時間まで24時間を切ってしまっていた。ここからは、15時間かけてスマホを取り返すための闘いになる。

最初は運転手さんが落とすものに気付いて戻ってくれるかなと期待して、降車地で1時間ぐらい待ってみたが返しに来る気配がなく、一旦ホテルに帰った。幸いノートパソコンも持ってきたため、Yandexの問い合わせ先の電話とメールアドレスを見つけた。しかし携帯を無くした自分は電話をかけることができず、通話できたとしても、自分のロシア語のレベルでは怪しい…。とりあえずYandexカスタマーサービス宛に経緯を細かく記載して送信。しかし、返信がきたのは、翌日帰りの飛行機を乗る直前だった。

その日の夜はインターネットで検索しながらひたすら対策を考えているうちに、体力が尽きて眠りに落ちた。翌朝、5時半に起きたが飛行機の出発まで15時間しか残っていない。とりあえず考えられる方法を全部やってみようと思い、まずホテルの受付のおじさんに相談してみた。もう無理だろと言うような表情をしながら、親切にYandexのカスタマーサービスに電話をかけてくれたが、その時モスクワ本社は営業時間外で繋がらなかった。それを聞いて絶望しかけた時、「アルマトイオフィスは、確かここから徒歩距離内だから行ってみたら？」とアドバイスしてくれた。

その時は朝7時頃、今からスマホを取り戻すために考えられる方法は二つ。一つはその町の領事館に助けを求め、Yandexに電話をかけてもらうか、ダメだとしても何か別のアドバイスを貰えるかもしれない。もう一つは、ダメ元でYandexの本社に行き直接相談。必ず対応してもらえ保証もなくコミュニケーションズを取れるかどうか不明だが、一番早い方法かもしれない。幸いパソコンで検索してみたら領事館はそのホテルの近くにあるようで、とりあえず行ってみることにした。

しかし、スマホを持っていないためグーグルマップは使えず、事前にホテルのWifiで地図を開いてそのままノートパソコンを両手で持ちながら領事館の方向に向かって歩くことにした。しかし、地図で表示された場所にたどり着いたら、目の前にはショッピングモールしかない。警備員さんに片言のロシア語で尋ねてみたら、別の場所だぞと告げられ、そのまま現金渡して警備員さんの携帯でYandexタクシーを呼んでもらう。しかし、警備員さんが教えてくれた場所は、領事館が記者会見を開く時の会場だった。またその警備員さんに相談して、さらに別のタクシーを呼んでもらいホテルに戻った。こうして無駄足をかけたうえ領事館の場所を見つけこともできなかった。ホテルの電話を借りて電話をかけても繋がらなかった。

残りの道は、Yandex本社に押しかけるしかないという覚悟を決めた自分は、早速パソコンでアルマトイオフィスの住所を調べて検索したら、ホテルから6キロ離れた都心の場所だった。また受付のおじさんに頼んでタクシーを呼んでもらい向かったが、向かった先のオフィスビルにはYandexのロゴはどこにもなく、周りを必死に探してみても見つからなかった。警備員さんと片言のロシア語で会話したらYandexは半年前もう引越した、と。しかし、警備員さんは新しい住所を書いて渡してくれた上、ホテルに帰るタクシーも呼んでくれた。Wifiのあるホテルに戻り、早速新しいYandex x オフィスの住所を調べたら、ホテルから徒歩20分ぐらい。結局受付のおじさんが話したことは嘘ではなかったのだ。

また朝のように地図を開いたパソコンを手で持ちながらアルマトイオフィスの新住所に向かって歩き始めたが、結局到着したのは40分後。そのビルは高くしてロビーも広く、IT会社に相応しいモダン感があるとても立派なオフィスビルだった。広いロビーの奥にある受付の女性スタッフさんに声をかけると、さすがに受付のお姉さんは英語が上手で無事にコミュニケーションズを取ることができた。事情を説明したら、最初はカスタマーサービスに電話をかけるようマニュアル対応されたが、スマホを無くしたから電話すらできないんだと必死に頼んだら、カスタマーサービスに電話してくれることに。それからずっとモスクワのカスタマーサービスと電話で話してくれて2時間かけた末、ようやくドライバーの携帯電話の番号を特定することができた。ドライバーに電話してもらおうとスマホを確認できた。もちろんただで返してくれるわけがなく、遠い所にいるからスマホを届けに来る費用が高いと言われ、仕方なく高めの金額を約束してスマホを届けてもらった。実際ドライバーがスマホを返してくれた時受付の人も立ち会ってくれたが、1万4000テンゲを渡したのを見るとкак дорого！(高いよ！)と声を上げた。

そんな風に色々な人の助けで、無事に紛失したスマホを取り戻すことができたが、その時は既に18時過ぎ。それからすぐに荷物まとめて空港に向い、ギリギリ飛行機に間に合った。カザフスタンの最終日、まさかこのような過ごし方になるとは旅立った時は想像もしなかった。そして、帰りの飛行機に乗る前に再びメールを開いてみたら、Yandexのカスタマーサービスと領事館からようやく返信が来ており、今日一日行動せずに待っていたら絶対スマホを取り戻せなかったと、改めて頑張った自分を少し褒めたい気分になりました。